

新しい時代を拓く大切なものの見方、考え方を提言する「くだけかけ」

しあわせの可能性

和田重良

子どもたちが山の「くだけかけ生活舎」の春や夏の合宿に来る時には、きっと「不安だけど」一歩を踏み出して来ているんだらうなと思っています。

普段家にお父さんやお母さんや兄弟とノンビリと過ごしているのから、この山の奥に頑張っているのにはフンギリが必要だと思うのです。ましてや「合宿」に初参加となると不安だらけだろうと思います。

そこで「思い切って一歩踏み出す」ということが、「家でダラダラと過ご

和田重良 (くだけかけ会代表)
 誰かがあんなに楽しく生きてくこと
 を願って、35年以上にわたり青少年や家庭の
 生活にさまざまなメッセージを送りつづけて
 いる。「両手で生きる」「子ども版人生タネの
 本」「いのちの満足」など著書多数。NHK
 テレビ・ラジオ深夜便「こころの時代」、テ
 レビ静岡制作「テレビ寺子屋」などに出演。



してしまおう」とか、「勉強しなきゃあ
 と思いつながらゲームしてしまおう」とい
 うようなことはまったくもって違っ
 た機会に恵まれ、こころの成長のチャ
 ンスとなるのです。

わずか数日間ですから、思い切って
 受験勉強から解放されるのもとてもよ
 い体験です。「くだけかけ生活舎」で体
 験できる農作業がよいのだとか、共同
 生活が身につくということだけではな
 く、それより何よりもっと大切なこと
 があるのです。

◆可能性に気づく

ぼくはずっと山からの通信として「たねニュース」
 というのを発行しています。「たね」というのは種
 子のことでして、動植物の繁殖に大きな役割をし
 ています。この種子の役割を考えるといろいろ面白
 いことに気がつくのです。

中でも種子の「可能性」というのはいろいろな
 のが組み込まれているので興味があるのです。種子
 の「可能性」の芽をひき出すキツカケというのは
 様々な条件です。元々備わっている「可能性」を芽
 生えさせ、それを活用していくための条件はとても
 大切なのです。農作物を育てている人はよくお分り
 だと思えます。

これが、「人間の教育」にも似ているものがあり
 ます。しかし、人間には精神活動があるので他の動
 植物よりすこしだけ「可能性」の芽は複雑なのです。
 人間の成長の場合、思春期以降に「自分の可能性
 に気づく」ということがとても大切で、それは一
 生死ぬまで必要なことなのです。ぼくのようにおじ

いさんになったからって「可能性に気づく必要はな
 い」ということはないのです。なぜなら「可能性の
 芽に気づく」ということそのものが「人生を生きる」
 ということなのですから。
 せっかく自分に組み込まれているものの、「可能
 性の芽に気づく」ということは「教育」の中では最
 も大切なことです。自分で「気づく」のを待つので
 すから、「わざわざ教え込んで気づかせるのではな
 い」というところが少し分りにくいかもしれませぬ。

◆条件は何だらう

「くだけかけ生活舎」の春や夏や冬の「合宿」に受験
 勉強を休んでも来る意味というのがその辺りにあ
 ります。「合宿」と言えばスポーツや勉強を厳しく
 集中的に鍛えるというイメージがありますが、「く
 だけかけ生活舎」ではそういう「やらせる」という厳
 しさはありません。が、こころの面で、甘えて守ら
 れている環境ではないのですから、そんな生活の中
 で「可能性の芽に気づく」という、より厳しいこと
 ろを考えているのです。

「農作業をさせてくれる」とか「食事のしつけをち
 やんとしてくれる」というようなご利益のつもりだ
 けで来ていると、本当の意味に出会えなくてつまら
 ないのです。できることなら「よい生活」の中にあ
 る「可能性に気づく」という所に目を向けて下さい。

ご本人が「自分の可能性の芽に気づく」ことがで
 きるのは何年後かも知れませぬ。大きく広い視野に
 立つことができるといういわば人生に「栄養分」が
 効いてくるには時間がかかるのです。
 不安でも一歩踏み出してみることが「やら
 なきゃ何も見えてこない」ということに通じます。
 来てしまえばすぐに馴染んでしまえば3日目にはまる
 で昔から知っている所のようになってしまう。
 甘えて、守られていたのでは見えてこないものに視
 野が広がるのです。

◆「できる」という感じ

「できた」というよろこび

ぼくは可能性の芽に気づくということが「教育」
 や「人生」においてはとても大事なことだと思っ

いるのです。

「できる」という感じを実感すること、「できた」
 というよろこびを味わうこと、それを「しあわせの
 可能性」と呼ぶのです。
 中学になる頃や高校生になってから、初めて「し
 あわせの可能性」を実感できます。人生の中で最も
 大切な時代です。この時期に「たね」を播いておく
 ことをハズせませぬ。

幼児や小学生時代にはその助走期間のような大切
 な時代があります。実感をともなう体験を重ねてお
 く必要があるのです。

ぼくはそのためにもう20年間も「14才講座」をし
 て来ましたが、今年も秋に埼玉県所沢と神奈川県
 小田原で「14才講座」が予定されています。そこで
 話す内容の「人生」「自分」「おとなになる」という
 三つのテーマはどれも「しあわせの可能性」を見失
 わないための「教育」の基本的なものなのです。
 テキスト「悩める十四歳・そこから出発」(拙著)
 をぜひ参考にして下さい。